

# 現代住宅作品におけるシーケンスからみた眺望の演出手法

奥山研究室 14\_10059 道関 高宏 (DOZEKI, Takahiro)

**1. 序** 建築空間において周辺の景色をいかに取り込むかは、建築の重要な意匠表現の一つといえ、建築家はこうした建築空間における眺望の演出を、移動を伴うシーケンスとあわせて多様に展開してきた。特に住宅においては、主室だけで眺望を得るものや、アプローチから玄関を通り、主室に至るまでの全ての場所で眺望が得られるものがみられ、具体的な生活を伴った小規模な空間において眺望の演出が高い密度でなされていると考えられる。そこで本研究では、景勝地に建つ住宅作品<sup>1)</sup>を対象に、アプローチから眺望に至るまでの経路における空間の性格と動線の複雑性について検討することで、住宅作品における建築家の眺望の演出手法の一端を明らかにすることを目的とする。

## 2. 空間単位の性格

図1に示すように、資料とした住宅作品より、アプローチから主室に至るまでの一連の空間を眺望経路として抽出し、眺望の種類について図2に整理した。眺望経路は、図1の分析例のように、平面的な拡がりや用途からいくつかの空間単位に分節して捉えることができる。これらの空間単位の用途を図3に整理し、さらに空間単位の属性として、開口や隣接する空間単位を通して眺望が得られるものを眺望空間、得られないものを非眺望空間と定義した(図4)。さらに、眺望空間の性格を、眺望に対する開口部の大きさから検討し、外部空間のテラスや内部で大開口から開放的な眺望が得られるものと、壁や屋根、窓枠などによってフレーミングされた眺望をもつもの(以下、[開放]、[フレーミング])に大別した(図5)。

## 3. 眺望経路の性格

本章では、眺望経路における眺望の性格と移動の複雑性を検討する。ここでは、前章で捉えた眺望空間のうち、各作品で主要な眺望が得られるものを主眺望空間<sup>2)</sup>、主眺望空間における眺望の方向を主眺望の方向と定義し、主眺望空間に至るまでの眺望空間の数、経路の移動における屈折について検討する。

**3-1. 主眺望の方向** まず、主眺望の方向は、眺望経路に進入する向きを基準に捉え、主眺望空間が複数の場合はその組合せを整理し、前方型、前方-側方型、側方型、

側方-後方型、後方型として捉えた(図6)。

**3-2. 眺望空間の数** 次に、眺望経路において主眺望空間に至るまでの眺望空間の数<sup>3)</sup>について整理した(図7)。その結果、眺望空間の数が1つのものが最も多く、2つのもの、主眺望空間以外に眺望空間をもたないものも多くみられ、ここから、主眺望しか見せないもの、主眺望以外に1つか2つの空間単位で眺望が得られる作品が捉えられる。

**3-3. 眺望経路における移動の複雑性** 次に、眺望経路の移動における屈折の回数を整理した結果、図8のような分布となった。

## 4. シーケンスからみた眺望の演出手法

前章までに検討した主眺望空間に至るまでの眺望空間の数を縦軸に、主眺望の方向を横軸にとり、全ての資料を

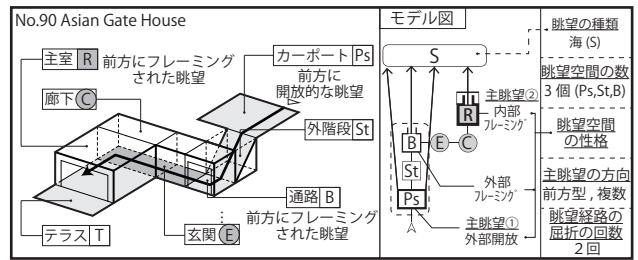


図1. 分析例

海 (S)	山 (M)	湖 (L)	森林 (F)	平原 (P)	街並み (Ts)
67 (6)	51 (7)	15	21	9	14

註. 0内は特定物を臨むもの

図2. 眺望の種類

外部						内部				眺望空間		非眺望空間	
カーポート前庭 (Ps)	ポーチ (Po)	ガレージピロティ (G)	テラス (T)	通路アリッジ (B)	外階段 (St)	玄関 (E)	廊下 (C)	階段室 (St)	居室 (R)	外部	内部	外部	内部

図3. 空間単位の種類

		開放	202	フレーミング	81
眺望空間の数	外部	111	90	21	
	内部	15	14	1	
居室		172	157	98	59

図5. 眺望空間の性格

		主眺望の方向				
		前方型	前方-側方型	側方型	側方-後方型	後方型
主眺望空間の数	単数	70	12	41	4	17
	複数	46	22	11		
進入方向		24	12	19	4	6

※進行方向の変わる階段やUターンする場合は1回屈折として捉える。

図6. 主眺望の方向

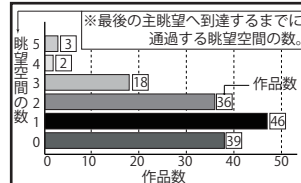


図7. 作品ごとの眺望空間の数

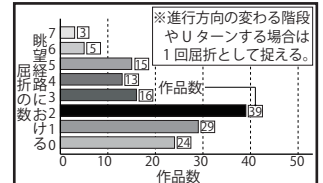


図8. 作品ごとの眺望経路の屈折の数

位置づけたものが図9である。その結果、前方型では眺望空間の数に偏りがみられず、一方後方型では眺望空間の数は少ないものが多く、前方-側方型では眺望空間の数が3つ以上のものが半数近くみられ、これにより、主となる眺望の向きによりそこまでに至る他の眺望の取入れ方が異なることがわかった。次に主眺望の方向ごとに検討すると、前方型では主眺望空間までの眺望空間がないものが最も多く、その内訳をみると、移動における屈折は2回以下が多くみられた。これは、眺望に向かって直進する比較的単純な移動経路の中で、最後のみを眺望をのぞむ空間とすることによって、主となる眺望を明確にするものといえる。次に、側方型では主眺望空間までの眺望空間がないものと、主眺望空間が複数でそれら他には眺望空間をもたないものが同程度みられた。さらにこれらの主眺望空間は、その性格が「開放」のものが大半を占めた。これらは内部の一室のみ、あるいは外部のアプローチおよび内部の一室といったように、眺望が得られる場所を絞り込み、眺望に対して平行する経路の中で最後に眺望に対して開放された空間が設けられるものである。また、前方-側方型では、内部と外部に主眺望空間を有し、主眺望空間の性

格が「開放」と「フレーミング」の双方を有する作品が比較的多くみられた。これらは眺望経路における一連の空間が視覚的にも連続し、経路の大半で眺望を捉え続ける中で、開口の操作により内部と外部における眺望を異なる性格のものとして演出するものであり、これらは全て海への眺望を有する作品であることから、多方向に広がる海に対する演出の型として位置付けることができる。

**5. 結** 以上、景勝地に建つ住宅作品を対象に、シークエンスからみた演出手法を眺望経路における空間の性格と眺望経路の複雑性から捉えた。その結果、一方向に眺望を設ける場合は、眺望に至る経路の中では眺望を見せず、最後に得られる眺望に限定して演出するのに対して、多方向に眺望を設ける場合は、眺望に至る経路の中でも様々に眺望を設けることで、その移り変わりを演出していることを見出した。

- 1) 1950年以降に出版された建築雑誌「新建築」や「住宅特集」に掲載されている住宅作品のうち、景勝地に建ち、大きな開口を持つ居室又は外部空間などから眺望が得られる、分析に十分な資料が得られた141事例(144作品)を対象とする。複数棟で構成されている場合は各棟を1作品として扱う。
- 2) 眺望空間のうち、雑誌に写真が大きく掲載されているものや、図面から判断して最も大きな開口を持つものを主眺望空間と定義する。
- 3) 主眺望空間を複数もつものは、最後の主眺望空間に至るまでの眺望空間の数を捉える。

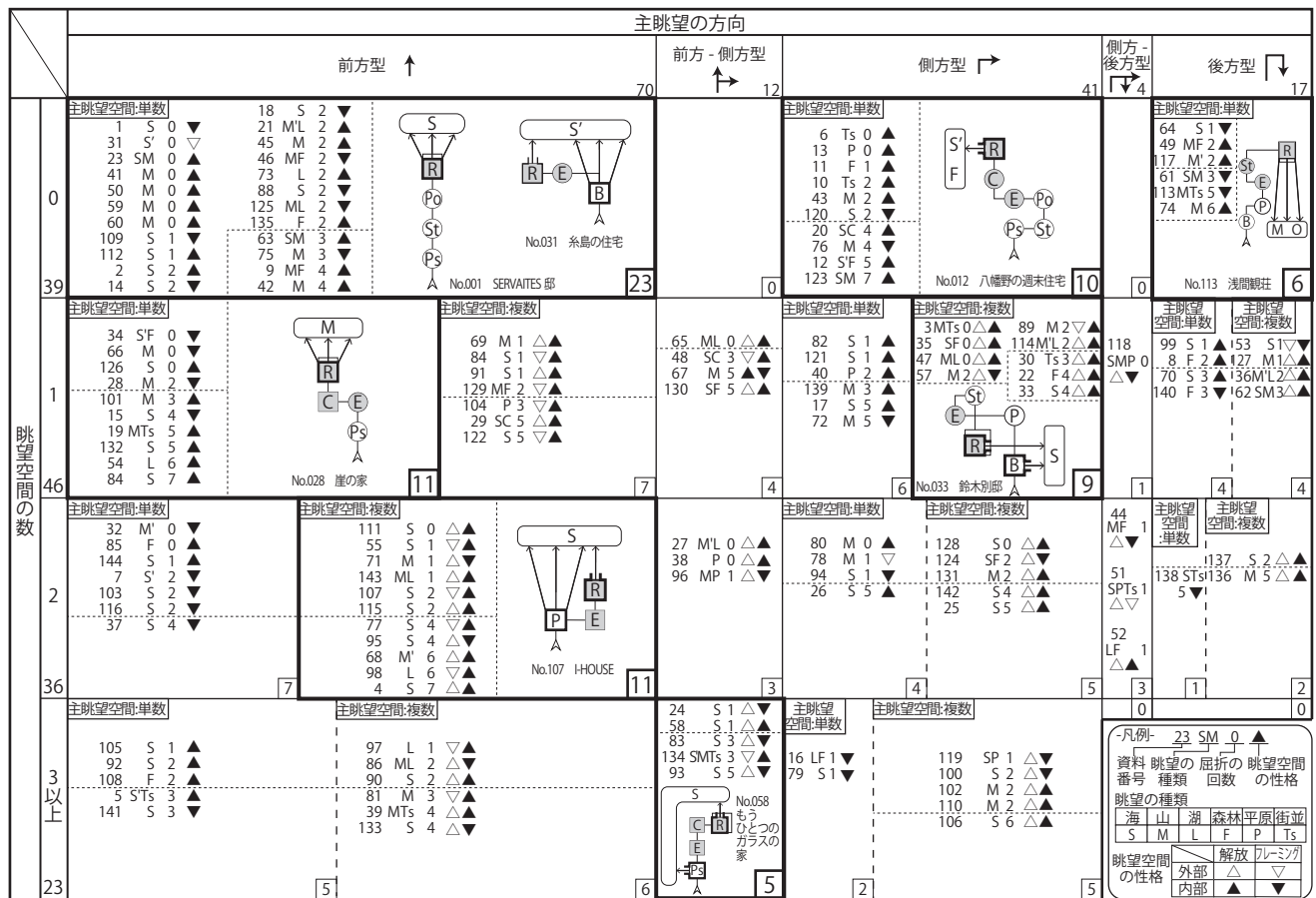


図9. 眺望の演出手法